

# 圖版解説

## 一 過去現在因果經斷簡 東京 安田善次郎氏藏

紙本著色 毫紙貼付 竪二六・二厘（八寸六分七厘）  
横九・二厘（三寸五厘）

古因果經の全體に就いては更めて云爲するを須ひない。現存の二本、各々諸家に分藏せられ、且つ何れも總四卷を全くしてゐないが、繪卷としては八卷に製せられたる如く「□月七日從八位寫書生」の文字ある報恩院本の末尾の本經第三卷上半に當ること、竝に正倉院文書（大日本古文書一三・一八四頁）に「繪因果經八司」とあること等によつて知られる。世上に流傳する殘簡のなほ往々にして新たに發見せらるゝものがある。此處に掲げたる殘簡はそのうち上品蓮臺寺、久邇宮家、報恩院、益田男爵家等に分藏せらるゝ一連のものに屬し、本經第二卷上半、悉達太子四門出遊の齣の一部に當る。而してこの五行は前山久吉氏所藏の一紙二十二行の殘缺の後を承けて直ちに久邇宮家御所藏の二紙半六十二行に連るもので、太子の北門出遊に際し、淨居天王の比丘に化作して太子の前に神通力を現する狀を述べてゐる。今その前後をこの二本を以て補ふに

時淨居天、化作比丘、法服持鉢、手執錫杖、視地而行、在太子前、太子見已、即便問言、汝是何人、比丘答言、我時比丘、太子又問、何謂比丘、答言、能破結賊、不受「後身、故曰比丘、世間皆悉無常危脆、我所修學、無漏聖道、不著色聲香味觸法、永得無爲、到解脫岸、作此」言已、於太子前、現神通力、騰虛而去「」間は本殘簡の文

圖は即ち淨居天の虛に騰つて將に去らんとする様であるが、就中その圖様の空想的なる、よく本經卷繪の全構想を窺ふべき好斷片である。なほ一言すれば、この一齣の圖様は經文の敘述と逆に描かれて居り、従つて此の圖に先づ諸場景

は却つて後に續く久邇宮家御藏本によつて見るべく、以て本繪卷の特殊なる構成法の一を知るに足るものである。賦彩並に描法に就いては之を圖版に見る所に譲るが、特に保存完好にして彩具の鮮美なるに、描法配色共に單純明麗の裡に高古渾樸の致を存する本繪卷の特色を見るを賞し度い。

尙安田家の所藏には本圖の外に更に經文七行の一殘簡がある。第一版之また直ちに久邇宮家御藏本の後に續くものであつて、太子の出家の意を父王に告げたるに、王の之を聞いて悲泣せる様を敘する。文の前後を補すれば

太子坐已、白父王言、恩愛集會、必有別離、唯願聽我出家學道、一切衆生、愛別離苦、皆便解脫、願必「垂許、不見留難、時白淨王、聞太子語、心大苦痛、猶如全剛摧破於山、舉身戰掉、不安本座、執太子手、不復能言、啼泣流淚、噓唏哽咽、如時良久、微聲」而言、汝今宜應息出家意、所以者何、年既少壯、國未有嗣、而便委我、曾不廻顧「」間本殘簡の文

圖の場景はこの文に照して自ら明かである。描法また嚮の一片と同じく、配色簡單にして諸人の衣に黃、紅朱、青、綠等の色を配し、幡等も之に準ずる。相貌衣文等の焦墨線、土坡樹葉の綠青等同じく全卷を通ずる手法である。地面に淡墨の横線數本を見るはもと何色かの存せしあとであらう。（豐岡）

## 二四 徽宗摹張萱搗練圖

米國 ボストン美術館藏

絹本著色 卷子裝

高 三七・〇厘（一尺二寸二分一厘）  
長 一米四五・三厘（四尺七寸九分五厘）

（矢代幸雄「徽宗摹張萱搗練圖」参照）

過去現在因果經斷簡(原寸)

東京 安田善次郎氏藏